

寝て起きた。気付いたら違う鎮守府にいた。それも黒い方らしい。

Ganguto

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日提督が目を覚ますと、いつもとは違う場所にいることに気付く。かくしてその場所の正体は——かつてブラツク鎮守府と呼ばれていた鎮守府だった。

目次

第一話	『知らない部屋』	1
第二話	『呻き声』	8
第三話	『捨てられた鎮守府』	15
第四話	『――必ず助ける』	22
第五話	『とある悪夢』	28
第六話	『迫る拳』	34
第七話	『秘密の地下道』	39
第八話	『闇を抜けた先に』	44

第一話 『知らない部屋』

「……………」

……ここは、どこだ？

体がどんどん沈んでいる。……水中、か？

「……………」

苦しくない……けど、声が出ない。体も動かない。目は……見え
る。でも、動かせない。しかも暗い。

……何もわからない。

『……………けて……………』

……………？

どこからか、声が聞こえる。下からか、上からか、あるいは横から
か。

『……………すけ……………て……………』

所々声が掠れていて、何を言っているのかよくわからない。けど、
それは何かにすぎるような、そんな悲しみに溢れていて……。

とてもじゃないが、聞いちゃいられない。

「……………う」

未だ沈み続ける中、俺は微動だにしない右腕を、力づくで振り上げる。全身に得体の知れない力が掛かっている、少しでも力を緩めれば押し戻されてしまいそうだ。

でも、それでもー。

『……………たす、けて』

この声を、どうしても無視することができない。

「ぐ……………お……………」

どこから聞こえるかもわからないその声に、俺は手を差し伸べる。

姿の见えない君の手を、俺は握れない。だから、掴んでくれ。

『……………あ……………』

深海のような暗闇の中、ふいに目の前に光が現れた。

そしてそれは、俺を包むように徐々に大きく広がってー。

* * *

提督「ーは、あ」

……気が付くと、ベッドの上にいた。見上げると、そこには見慣れた天井がある。

提督「……夢、か……………」

フー…………と深く息を吐き、目を閉じて腕を額に当てる。夢を見るなんて久し振りだが……妙にリアルな夢だった。あの声の主は、一体誰だったのか。

……それはともかく、おかげで身体中汗びっしよりだ。風邪を引く前に、早く着替えを済ませねば。

提督「…………ん？」

ベッドから立ち上がり、部屋を見回した直後……違和感を覚えた。

提督「……俺の部屋じゃ、ない…………？」

ここはまるで、物置部屋のような場所だった。

部屋の隅に置いてあるいつものクローゼットはなく、机や本棚、果てはカーテンすら存在しない。

それに今気付いたが、ベッドには布団も枕もなかった。俺はそんな状態で寝ていたのか。

提督「……卯月らへんのドッキリか？ いや、でも流星にここまでするとは考えにくいし……………」

異常な光景に停止した頭をフル回転させて、状況を把握しようとする。みる。

提督「…………取り敢えず、一旦外に出てみよう。何か分かるかもしれ

ない」

ひとまずそう決心すると、汗に濡れた服もそのままに扉へと向かう。ギシギシと床が鳴っているが……俺の部屋ならこんなことはなかった。本当にここは俺の部屋ではないらしい。

『……………』

『……………』

提督「…………む」

扉の前につくと、何やら話し声が聞こえた。……さては明石が空間物質転送装置でも作ってやらかしたな？

前例がありすぎて困る。何か起きたらまず明石。これはもう俺の中での常識だ。

提督「全く……その技術を他に活かしてくれればいいものを……」

嘆息しつつ、扉のノブに手を掛ける。そして、頭をガシガシと掻きながら、軋む扉を開けた。

提督「おい明石、勝手に俺で実験するなど言っているだろうが。全く、何度言えばお前は……」

そこまで言っつて、目の前にいるであろう明石に目を向ける。……が、そこにいるのは明石などではなく。

睦月「…………!？」

如月「……っ！」

先月『改二になったばかり』な筈の睦月と如月が、俺の姿に驚いたように目を見開いて、そこに佇んでいた。

提督「……は？」

またしても、一瞬思考が停止した。それに、その反応は何だ。

提督「何で、お前達……改二じゃないんだ………？」

事態の異変に気付き、俺は屈んで睦月達と目線を合わせる。……が、何か様子がおかしい。

睦月「……あっ……う………！」

如月「………っ」

提督「……？」

……何だ？ 何でこんなに怯えてる？

というか、二人共、なぜか小破のままだ。入渠はしていないのか？

提督「なあ、睦月……」

睦月「ひっ!!」

如月「……っ!!」

睦月を宥めようと手を差し伸べると、睦月が過剰に反応し、逃げる

ように後ずさる。その次の瞬間、俺の頭のすぐ横で何かガチャリと重たい音が鳴った。

如月「睦月ちゃんに、近づかないで……っ!!」

提督「!?!」

見ると、如月が艤装を展開し、手に持った単装砲で俺の頭に照準を合わせていた。

提督「き、如月……?」

如月「早く、離れて……!　いくら駆逐艦の砲撃でも、人の頭くらいなら簡単にな……!」

そう言つて、如月は砲口を俺に向け続ける。しかし、その手はふるふると震え、瞳は涙で潤んでいた。

……俺の知っている如月はこんなことはしない。

提督「……わかった。すまない、今離れる。だから如月も砲塔を下ろしてくれ」

如月の訴えに、大人しく身を引く。しかし、如月は俺から照準を下ろしてはくれない。

間違いなく警戒されている。一体何故……?」

如月達が豹変した理由が分からず、頭はあくまで冷静に、俺はただただ混乱してしまう。……が、その直後、如月が放った一言で、その冷静さはいとも容易く打ち砕かれた。

如月「……貴方は誰……？
何で、こんなところにいたの……？」

第二話 『呻き声』

提督「……………」

……………言葉が出ない。

提督「きさ、らぎ……?」

如月「答えてっ! ……貴方は誰なの? ……ここで何をしていたの?」

覚えていない……いや、忘れているのか? 昨日の今日で?

……待て、少し頭の中を整理しよう。取り敢えず冷静になれ。

まず、如月と、おそらく睦月もだが、俺のことを覚えていない……というより、知らない、と言った方がいいか。

この目を見る限り、冗談で言っているようには見えない。そもそも、如月は冗談でこんなことを言うような娘じゃない。睦月もそうだ。あれは、本気で何かに怯えている目だ。

それに、改二の件もおかしい。レベルアップはできても、レベルダウンなんてことはできない筈だ。する意味もない。

……………レベル……………練度、か。

提督「……………すまない、君達の練度は今いくつだ?」

如月「……？　それがどうー」

提督「いいから。教えてくれ」

如月「っ……………じゆう、なな……………」

提督「……………なるほど、わかった。ありがとう」

……………ああ、これで確信した。

それだけ聞くと、俺はゆつくりと立ち上がる。そして、未だカタカタと震えている二人の横を通り過ぎ、廊下の奥へと進もうとしたーその時。

長門「何者だ貴様あっ!!」

提督「っ!?!」

突然、正面から尋常じゃない速さの拳が飛んできた。

俺は咄嗟に体を横に避けギリギリで回避するが、不意を突かれたこともあり、拳は頬を掠め、頭の横を突き抜けた。いきなりの出来事にバランスを崩しそうになるも、すぐさま体勢を立て直し、次に来るであろう追撃に備える。

しかし、追撃が来ることはなかった。

長門「睦月、如月っ！　大丈夫か!?!」

俺に殴りかかってきた張本人である長門は、睦月と如月に詰め寄り、二人の安否を確認している。

提督「この様子だと、長門もか……！」

見ると、長門も改造を受けていなかった。長門はうちで最古参の艦娘の一人だ。そんな奴を改二へと改造した日のことを、俺が忘れるはずがない。

……ここには駄目だ。とにかく、今は艦娘と顔を合わせない方がいい。

俺は身を翻し、急いで廊下の奥へと足を運ぶ。

長門「っ！ おい、待てっ!!」

後ろを振り返ると、こちらの動きに気付いた長門が走って追いかけてくるのが見えた。それも、向ける相手を間違えていると言いたくなるほどの、殺気の籠った目をこちらに向けて。

提督「くっ……！ 今、捕まるわけにはいかないっ……！」

捕まれば、確実に殺される。例え殺されなくとも、拷問レベルの拘束を受けるに違いない。あの目は、そういう目だ。

早く、ここから離れなければ。

*

*

*

提督「はあ……はあ………ふう。……よし、撒いたみたいだな」

あれからかれこれ5分程度、俺は全速力で鎮守府内を走り回った。どうやら後を付いてきてはいないようだが……長門が低速艦で助かった。

とはいえ、まだ追ってきている可能性もない訳じゃない。一刻も早く、この事態に收拾をつけなければ。

提督「……ん？」

頬を垂れる汗を腕で拭ったその時、どこかで声が聞こえた。しかもそれは、最近になって聞いた覚えのある声だ。

提督「何だ……？」

俺は耳を澄ませ、声の出所を探る。するとその声は、廊下の更に奥から聞こえてきていた。

俺は息を潜め、側の階段に空いた空間の壁の陰に身を隠す。しかし、声が一向に大きくなならない以上、近づいてきている訳ではなさそうだ。

提督「……艦娘だろうな。他に人間がいるとは思えん」

……行くか。顔を合わせずとも、覗くくらいなら大丈夫なはずだ。

意を決して、その声を辿るようにゆっくりと歩き出す。すると、だんだん声の発信源に近づくとつれて、声の重なりが大きくなっていく。

それも、話し声ではない。呻き声のような、何か……。

提督「……………」

……嫌な予感がする。

提督「……………ここからか」

辿り着いたその先、そこには真つ白な両開きの大きな扉があった。扉には装飾が一切施されておらず、ただ金属製の取っ手が付いているだけの簡単な作りだ。

……にも関わらず、ここから滲み出る得体の知れない圧迫感は、一体何なのだろうか。

提督「鍵は掛かっていない……………か」

知れず、ごくりと唾を飲み込む音が聞こえた。

腕を伸ばし、取っ手を握る。掴んだ取っ手を捻り、手前に引くと、キィィィ……………と音を鳴らして、扉がゆつくりと開かれていく。

……この時、一瞬でも俺がこの扉を開けることを躊躇していれば、どれだけ良かったかわからない。

少なくとも、こんな惨状を目の当たりにする事は、なかったのだから。

提督「うぐっ……………!？」

まず初めに飛び込んできたのは、耐え難い程の異臭だった。

だが俺は、この臭いを知っている。軍人なら、誰もが既知であるこの臭い。

提督「これはっ……!!」

……それは、紛れもなく血の臭いだった。それも、かなりの密度でこの部屋に充満している。

背筋に戦慄を覚え、俺は手で口元を塞ぎながら、部屋の中に足を踏み入れる。中は電気がほとんどついておらず、見渡す限り暗闇で先が見えない。この部屋がどれだけ広いのかはわからないが、それなりに大きな部屋だということはわかった。

それは何故か。……ここに来る前から聞こえていたあの唸り声が、今なお木霊するように部屋中に響いているから。

提督「っ…………!!」

ふと、廊下から洩れる光の先に、何か床に置かれていることに気付いた。

薄暗さゆえに、最初はそれが何なのかわからなかった。しかし段々と目が暗闇に慣れてくると、徐々にその輪郭が明確になってくる。……そして、見てしまったことを後悔した。

――床に転がっていたそれは、二の腕半ばで千切れた人間の腕だった。

提督「――!!」

背筋に悪寒が駆け抜け、心臓が堰を切ったように脈打つ。息を荒げるどころか呼吸さえも忘れて、俺はただ立ち尽す。

提督「……………」

次の瞬間、俺は無意識に顔を上げていた。見ない方がいいと、顔を上げるなど、本能が訴えてくるのが嫌でもわかる。だが、もう遅い。

「ー今度こそ、息が、止まった。」

提督「……………」

部屋の中は、まるで野戦病院の如く、傷を負った艦娘達で溢れ返っていた。

第三話 『捨てられた鎮守府』

床に寝ている者、壁に寄り掛かっている者。見渡す限りその全員が、体のどこかしらが包帯で巻かれている。そしてその包帯からは、必ずと言っていいほど血が滲んでいた。

中には、体の一部を欠損している者までいる。おそらく、処置の仕方がわからなかったのだろう。欠損した箇所は無造作に包帯が巻かれているだけで、応急処置などはとられていない。これがもしも人間なら、傷口から腐食が始まり、命を落としていてもおかしくないくらいだ。

提督「な……んだ……これ、は…………」

惨状を目にして、やっとの思いで開いた口から出た言葉は、語彙力の欠片もない陳腐なものだった。しかし、たったそれだけの言葉で、この事態を形容するには事足りる。

提督「……ッ!？」

ふいに、右の大腿から伝わった謎の振動が、手放す寸前だった意識を強引に現実へと引き戻させた。

慌ててポケットの中を漁ると、身に覚えの無い通信機のようなものが入っていた。そしてそれは、今なお振動を続けている。

恐る恐る交信を示すマークの入ったボタンを押し、それに耳を傾けると――。

明石『あー、あー、……はいはい、提督ですか？ すみません、聞

「こえます?」

提督「っ……………明石っ……………!」

そこから聞こえてきたのは、明石の声だった。

明石『あ、良かった繋がった。もう、さつきから結構かけてたんですけど、一向に出てくれないから焦りましたよ! もしかして壊れちゃったのかなー、なんてー』

提督「明石」

能天気な明石の声を遮り、静かに奴の名前を呼ぶ。いつもは聞いていて明るい気持ちになる明石の声が、今はいやに煩い。

提督「……………答えろ。これはお前の仕業だな? ここはどこだ? 一体ここで何が起きてる?」

明石『ちよつ、そんないきなり捲し立てられても! 一個ずつ説明しますから、少し落ち着いてください』

提督「……………わかった」

正直、とても落ち着いていられる心境ではないが、無理やり負の感情やら困惑やら怒りやらを押し込んで、明石の説明を聞き入ることにする。

……………とりあえず、この部屋から出よう。ここには、まともな思考が働きそうにない。

扉の外に出た俺は、深く息を吸って正常を取り戻し、再度通信機に

耳を傾けた。

提督「……すまない、待たせた。いいぞ」

明石『えつとですね、まず始めにそこがご自身の鎮守府でないことはわかっていますよね?』

提督「ああ」

長門に追われ、鎮守府内を走り回っていた時、周りの景色に違和感を覚えた。それは、ここの部屋の数だ。

提督（走っている時は気づかなかったが……俺の鎮守府には、ここまで扉の数はない。それに、扉の上にあるネームプレート……艦種も何もかもバラバラだった。あんな組み合わせにした覚えはない）

明石『あ、流石です。とはいっても、私からはその座標しかわからないので何とも言えないんですが……提督がそんな取り乱すなんて、一体そこはどうなってるんですか?』

提督「……惨状だ」

明石『え?』

聞こえづらかったのか、明石が聞き返してくる。それが、やけにもどかしい。

提督「……俺が今いる部屋は、重傷の艦娘たちが大勢寝かされている。ここに来るまでの道中、廊下を歩いている艦娘にも何人か遭遇したが、入渠はできていないようだった。おそらく、入渠設備が死んでいるんだらう。おそらく動ける者たちがそれなりに処置をしたんだ

ろうが……それでもまだ酷い有り様だ。……ここまでの惨状を、俺は見たことがない」

なるべく簡潔に、そのままの状況を説明する。わざわざ事を大きくして伝える必要はないだろう。

明石『……………』

通信機から明石の声が途絶え、一瞬もの間静寂が訪れる。こちらの状況を察知して、明石も言葉を失っているのだろうか。

……しかし、次に返ってきたのは、俺の予想を裏切る言葉だった。

明石『…………やはり、そうでしたか』

提督「!？」

知っていたといわんばかりの明石の返答に、思わず目を見開く。

それを言及するよりも先に、明石は続ける。

明石『数か月前、ある鎮守府の提督が、そこに所属している艦娘に対する過剰な暴力行為、抑圧行為で逮捕され、強制解任されたという話を覚えていますか？』

提督「…………ああ」

思い出すのも腹立たしい。過剰なまでの出撃・遠征は日常で、疲弊して使い物にならなくなったデコイの弾除けとして使う。少しでも反抗しようものなら暴力・監禁は常套手段で、恐怖を植え付け強制的に従わせていたという。拳句の果てには、我が功績のためならと捨

て艦戦術も平気で行うような、艦娘をモノとして扱うクズと呼んでも差し支えない男だった。

提督「……まさか、ここがその鎮守府だということのか？」

明石『はい。座標を確認したときに、妙に最近見覚えのある場所だなどと思って調べてみたんですが……まさしくドンピシャでした。その提督がクビになってから、特に後任が就くこともなく、事後処置もされていなかったなので、艦娘はそこに放置されていたみたいですね……。まさか、そんな事態になっているとは思いませんでした』

提督「……」

沈黙が流れ、想定外の現状に歯噛みする。確かにそれなら、あの睦月や如月たちの反応も頷ける。おそらく、あいつらも前提督による圧政を受けていた艦娘の一人だったのだろう。その時に植え付けられた人間に対する恐怖が一カ月経ってようやく薄れてきたところに、俺と出くわしてしまったことで、拒絶反応を引き起こさせてしまったんだ。

明石『……提督、ごめんなさい』

提督「……何？」

知らなかったとはいえ、癒えてきていたであろう傷をまた広げてしまったと自責の念に駆られていると、明石が突然謝罪を口にした。

ごめんなさい、だと？

提督「なぜ謝る」

明石『今回の件は、全責任が私にあります。軽い気持ちでやったことが、まさかこんなことになるなんて……』

提督「……そういえば、俺がここに飛ばされた経緯をまだ聞いてなかったな」

明石『はい……これは数日前の話になるのですが、私が前々から開発を続けていた装置がつい完成したんです。それで、その装置というのが……対象の物体を、設定した座標に転送するというものでして』

提督「もういい。大体事情は分かった」

弁明を聞き、内容を察した俺はすぐさま話を切る。あの時はほんの冗談のつもりで言ったのだが……まさか本当にそうだとはい。

天を仰ぎ、思わず溜め息が漏れる。

明石『本当にすみません……』

提督「いいと言っているだろう。……それに、おかげでいくらか冷静になった」

そう言つて、目の前の惨状に向き直る。今やるべきことは、こんな言い争いじゃない。

手の届く範囲に、倒れた者が大勢いる。なら、俺がすべきことは何か。

そんなこと、決まっている。

提督「……明石。お前はさっき、この座標を確認したと言っていたな。なら、その転送装置とやらで、ここに大量の高速修復材を送ることはできるか？」

第四話 『ー必ず助ける』

明石『へ?』

提督「この様子を見るに、恐らくドックも機能していないはずだ。この人数だと、消費する修復材の数も馬鹿にならないだろうが……渋っていても仕方がない。やれるなら今すぐにもー」

明石『ちよ、ちよつと待つてください! まさか、倒れてる艦娘たちを全員助けるつもりなんですか!?!』

淡々と話を進める俺に、明石が驚愕の入り混じった声を上げた。

提督「当たり前だ。目の前に倒れている人がいたら、軍人として……いや、人として見過ごすわけにはいかない。それに、事が事だ。事態は一刻を争う」

明石『近々大規模作戦だつてあるんですよ!? その鎮守府だつてそれなりの規模でしたし、艦娘の数だつて尋常じゃありません! それに、大本営に掛け合えばきつと適切な処置を取ってくれまー』

提督「その大本営が数か月も放置したというなら、おそらくここは見捨てられたんだ。前線から切り離されたとしたら、お前の言う適切な処置なんてものがされる筈がない。わざわざそんなことをする余裕があるなら、まさしく前線に位置する他の鎮守府の支援に回したほうがよっぽど効率的だ」

明石『つ……!』

俺の見解を聞いた明石は一瞬言葉を詰まらせると、はあ……と通信機越しでも聞こえるほど大きく息を吐いた。

明石『……わかりました。今回は全部私のせいですし、修復材の件はのみます。でも、遠征組の子たちにはご自身で謝ってくださいね？
流星に大規模作戦を無視するわけにはいきませんから、今回使用した分は遠征で補ってもらえるよう、今回の件を説明したうえで大淀に言っておきます』

提督「すまない。大淀とそいつらには、俺が帰った時に何らかの形で返すとも言っておいてくれ。俺にできることなど微々たるものだが、どんなことでも誠意を持って応えよう」

明石『どんなことでも、っていうのはちよつとまずい気がしますけど……』

明石がボソツと何かを呟いた気がするが、まあ気のせいとしておこう。

提督「それで……修復材を確保でき次第、こちらに装置を使って転送する。その算段は大丈夫なんだな？」

明石『あー……そのことなんですが……』

提督「おい、何故言い淀む」

気のせいだろうか。今、両手の人差し指をくつつけて、不自然なほど目を泳がせている明石の姿が見える。

明石『……すみません。今確認したんですけど、どうやらこの装置、提督を転送したたった一回で壊れちゃったみたいで……ぶつちやけ

直せるかどうかもわかりません』

提督「……薄々思っちゃいたんだが、お前の発明品は何かと爪痕残さなきや気が済まないのか？」

明石『うぐつ……！　こ、今回は久しぶりに有益なものができるんで舞い上がっちゃってたんですよお！　テストプレイもせずいきなり動かしたのは反省してます……ほんとごめんなさい』

徐々に尻すぼみになっていく明石の声を聞きながら、俺はもはや呆れを通り越してただただ感心してしまう。が、そんな呑気なことを言ってる暇はない。

提督「できなくなったことをうだうだ言っても仕方ない。何か別の方法はないのか？」

明石『あるにはありますけど……これやったら確実に大淀に怒られると思うんですよね……』

提督「あるなら言ってみろ」

明石『んー……いや、やっぱやめときましよう。でも安心してください、他の手も思いついたので！』

提督「おい、人の話を」

明石『これだとちよおーつと時間かかるので、そうすねえ……提督には、艦娘たちの応急処置をしてもらいましょうか。大丈夫です、機材がなくてもできるくらい簡単なので、医療知識のある提督ならできるとは思います！』

勝手に話を進められた。その『手』とやらに問題があると、後々処理が大変なんだが……明石だし、ろくなことにはならなそうだ。

提督「……まあいい、その手段については後程聞くとしよう。とにかく今はこの現状を少しでも改善したい」

明石『了解です！ ここからだとは大体……んー……五時間くらいですかね？ じゃあそれまではお願いします！』

提督「わかった。……いや待て、五時間だと？ やっぱりその前に手段についての説明を」

明石『艦娘はですね、艦装を展開していない状態なら処置の仕方は人間と何ら変わりません。しかし、艦娘は人間とは違って自然的な再生能力を持っていないので、あくまで傷の痛みや怪我の進行を食い止めるというのが関の山でしょうか。もともと艦装を展開する理由としては、深海棲艦への攻撃手段の獲得と、装甲を纏うことによるダメージの軽減がありますからね。入渠ってというのはつまり、その被弾した装甲を修復するって意味合いなんですよ』

俺の訴えに微塵も耳も傾けず、つらつらと説明を始める明石。本当に何をするつもりなんだ……もう仕方あるまい、一応覚悟はしておいた方がいいか。

明石『ですので、あくまで入渠は装甲の修繕であって、生身そのものを治すことはほとんどできません。つまり、戦闘で内部にまでダメージを負ってしまうと、入渠程度の治癒効果では簡単には治らないんです。……そこで作られたのが、高速修復材というわけなんです』

提督「……つまり、この現状を見る限り、俺の判断は間違っていない」

てことだな。まだ動ける連中も手は尽くしたんだろうが、おそらく知識がなかったせいで杜撰な処置しかできなかつたに違いない」

明石『提督の話だと、たしか体の一部を失ってしまったている娘もいるんでしたよね？ 解任からだいぶ時間が経ってるので、急いで手当てしないと間に合わないかもしれません。いくら丈夫だとはいえ、精神や内部にダメージが蓄積しすぎると、艦娘としての機能を失ってしまう可能性がありますから』

提督「了解、肝に銘じておく。それじゃまた後で」

明石からの忠告を受け、俺は交信を切ろうとボタンに指を伸ばす。すると、けたたましくノイズを含んだ明石の大声が通信機から鳴り響いた。

明石『あー、ちよつと待つてください！ 今その鎮守府の内部構造を地図として転送してますから、よければどうぞ！』

提督「おお、それは助かる。構造が俺たちの鎮守府と似ているようで全く違うみたいだからな。しらみつぶしに探す手間が省けた」

明石『もとは私の責任ですし、これくらいはやりますよ。では、何かあつたらいつでも連絡お願いします！』

提督「わかった、そちらも頼んだぞ」

念を押すように言った俺の言葉を最後に明石の声が途切れ、入れ替わるようにして画面に地図が映し出される。その中央で、黒い矢印が点滅しながら圧倒的な存在感を放っていた。

提督「ご丁寧にGPS付きか……こういう技術に関しては本当に頭

が上がらんな」

明石の手際の良さに舌を巻きながら、両手にぐつと力を込める。ここまでことを動かした以上、もう引き返せない。もとより、撤回するつもりは毛頭ないが。

提督「……必ず助ける。誰一人として死なせはしない」

握った拳の力を抜き、己を奮い立たせるようにそう呟いて、俺は廊下を走りだした。

第五話 『とある悪夢』

——深い深い暗闇の中、辺り一面が煙に覆われ、方角もわからないままに私は無我夢中で突き進む。

「うっ……!?!」

そんな私を狙い定めて、唸り声を上げながら砲弾の雨が襲い掛かってきた。すぐ近くに水飛沫が次々と上がり、その度冷たい海水が傷だらけの体に叩きつけてくる。

どうして、私がかんな目に合ってるんだろう。他のみんなはどこに行っただろうか。……そもそも、ここはどこなのだろう。

そんな疑問が終始頭の中を駆け巡っているが、その答えに辿り着かないままに私は走り続ける。走っても走っても、目の前の煙は一向に晴れてくれない。それどころか、濃くなっている気さえする。

「何とか、ここを抜けてっ——あああつ!!?」

そう呟いた次の瞬間、右腕に鋭い衝撃が走った。そして、後から聞こえてきた小さな破裂音と共に、バランスを崩した私は勢いもそのままに頭から海面に突っ込んだ。

「ぐっ、ああああああ——っ!!!」

意識が飛びそうなほどの痛みに、濡れるのも意に介さず海面で悶える。喉が裂けるほど叫び散らし、右腕を抑えて痛みを何とか紛らわせようとするも……そこにあるべき右腕の感触がない。

朦朧とする意識の中、チカチカと点滅する視界には……歪な断面を残して、そこから赤い液体がぼとぼと海に零れ、海中に溶けていく瞬間が写っていた。

――腕が、ない。

「つああああああああ――――つ?!?!?!」

理解しがたい現実^に直面し、せめてもの防衛本能が働いたのか一気に気が遠くなる。が、波のように押し寄せてくる激痛が、手放しそうになった意識を強引に引き戻す。

延々とそれを繰り返し、もはや神経も衰弱しきった頃、ふいに目の前に人影が現れた。そいつは私の姿を見るなり、口元をニタリと歪ませ、手に持った得物をガチャリと鳴らした。

もう、見なくともわかる。こいつの砲口は今、私の頭に向いているんだろう。……ああ、私の意識が落ちるのが先か、砲弾に頭を撃ち抜かれるのが先か。

「――――ハハ、惨メダナ」

――意識が途切れる寸前、最期に聞こえてきたその声は、明らかな嘲笑と、侮蔑の色が浮かんでいた。

*

*

*

北上「――――つ!!!」

意識が覚醒し、飛び跳ねるようにして起き上がる。喉はカラカラに乾ききり、息も荒く呼吸する度肩が大きく上下していた。

霞んだ状態から徐々に視界がはつきりし始め、水銀灯に照らされた室内が目に映る。先程までの怖いくらいの暗闇は、見渡す限りどこにも見当たらない。

そうして、私はあれが夢だと悟った。

北上「……………また、この夢……………」

何度も見てきた悪夢から醒め、汗だくの顔を左腕で強引に拭う。ようやく薄れてきたと思ったら、忘れさせないかのようにまた浮き上がってくる。……………実際、忘れなんてできないんだけど。

北上「……………つて、何で電気が—————ぶっ!？」

ようやく部屋の異常に気付き、辺りを見回そうとしたその時、右腕に鋭い痛みが走った。途端に私は左手で肘から先のない右腕を抑えるが、その触れた感触の違和感に、はっと目を見やる。

北上「あ、れ……………しつかり手当てされてる……………」

さつきこそ痛かったが、前よりも痛みは引いているように思えた。……………あ、他の傷にも包帯が巻かれてる。

長門や陸奥を悪く言うつもりはないけど……………艦娘の巻き方とはまた違う。……………なんか、慣れてる人がやってくれたって感じだ。

北上「……………あ、他のみんなにも」

まさかと思いい見渡すと、私と同じように重傷だった娘たちにも新しく手当てがされていた。心なしか、みんなの表情は以前よりも穏やかになってるような気がする。

北上「この手当てといい、電気といい……一体誰が………っ!？」

そんなことを考え、扉の方に視線を向けると、近くに一人の男の人が座っていることに気付いた。瞬間、喉元まで出かかった声を無理やり飲み込み、静かに大きく息を吐く。危うく大声を上げそうになってしまった。

北上「……っはあ!　び、びっくりした……誰、この人……?」

私は身構えながらも、遠目でその人を覗き込む。すると、その男の人は寝ているようで、壁に寄りかかり、腕を組みながら静かに寝息を立てていた。

寝ているのがわかると、私はほっと胸を撫で下ろす。男の人を見るのはあいつがいなくなった時以来で……もし起きていた上に声なんてかけられようものなら、私はもっと取り乱していたかもしれない。

……大丈夫、もうあいつはいないんだ。冷静にならなくちゃ。

そう自分に言い聞かせながら、もう一度その人を見る。すると、その傍らに、血だらけの包帯やガーゼなどが山のように詰め込まれた袋が置いてあるのに気付いた。それに、組んだ腕の隙間に見える手は、ついた血を洗い落としたんだろうけど、まだ血の跡が残ってる。

北上「……もしかして、この人が………?」

そう結論付けようとしたその時、扉が掠れた音を立てて開いた。突
然の来訪に、私の肩がビクツと跳ね上がる。

陸奥「失礼するわね……あら？　電気が直って……？」

北上「……ああ、もう巡回の時間か……驚かせないですよ」

扉を開けて入ってきたのは、陸奥だった。腕には、包帯などの医療
器具がたくさん抱えられている。

陸奥「あ、北上、起きたのね。ちよつと待ってね、今包帯換えるか
ら」

北上「いや、やんなくていいよ。なんかもうしてあるし。……見れ
ばわかると思うけど、他のみんなも同じように手当てされてるよ」

陸奥「え？　……本当、きれいに巻き直されてる。どうして……？」

北上「……多分、そこで寝てる人がやってくれたんじゃないの？」

そう言つて、私は陸奥の後方を指さす。陸奥は私の言葉に疑問符を
浮かべながらも、言われたとおりに振り返り……叫び声を上げようと
して、すぐさま口を塞いだ。

陸奥「きゃつ……!!　……あ、危なかった……この人は？」

北上「……知らないよ。気付いたら手当てされてて、いつの間にか
その人がいた。あとは手に血痕が残ってたから、あたしが勝手にそう
思っただけ」

陸奥「……そう。多分、電気を復帰させたのもこの人ね。……けど

もしかしたら、さつき長門が言ってた侵入者かもしれないわ」

北上「侵入者？」

陸奥「さつき長門が廊下で出くわしたって言ってたのよ。――とにかく、この人に聞くことは多そうね」

陸奥はおもむろに立ち上がると、未だ眠っている男の人に鋭い視線を向けながらそう言う。……その言葉には、とても拭いきれないような、あの頃と変わらない敵意が宿っていた。

第六話 『迫る拳』

提督「……う、ぐ」

朦朧とする意識が覚醒し、うつすらと瞼を開ける。どうやら、いつの間にか眠っていたようだ。

提督「……しまった、いま何時……っ!？」

気怠く重い頭を持ち上げ、時間を確認しようと腕を持ち上げようとするも、全く動かない。気が付くと、俺は椅子の上に座っており、後ろ手に両腕を縛られていた。

提督「これは……」

「……お目覚めか、侵入者」

明らかな異常事態に困惑を露わにしていると、ふいに目の前に人影が現れた。逆光に照らされ表情がよく見えないが、そのシルエットには見覚えがある。

提督「……長門、か？」

長門「黙れ。貴様に名乗る名前などない」

人影——長門はぴしゃりと切り捨てると、あの時と同じような敵意の籠った目をこちらに向け、仁王立ちで俺の前に立ち塞がった。

長門「貴様がどこの誰で、どうやってここに入り込んだのかは知ら

ないが……見つかったのが運の尽きだったな。さあ、何が目的だ。吐いてもらおう」

提督「……目的なんてない。俺はただ飛ばされてきたただけだ。うちの工作艦の悪戯でな」

長門「工作艦だと……？ 貴様、まさか指揮官か？」

工作艦というワードが俺の口から出た途端、長門の目の色が変わる。しかしすぐにハツと鼻で笑うと、

長門「あいにく、そんな冗談に付き合ってもらえるほど私の気は長くはないぞ。妄言や寝言の類なら、眠ってから言うんだな」

提督「……なぜ、これが妄言だと思う？」

長門「これまでも提督を自称してきた侵入者が大勢いたものだな。ここが鎮守府であることを知ったのことだったのだろうが、軍の内情など何も知らない不届き者どもはすぐにボロを出す。そして慌てて逃げ出すわけだが……まあ当然逃がすこともなく、その全員に痛い目を見てもらったよ」

光などない荒んだ瞳でどこか遠くを見据え、昔を懐かしむような表情を浮かべる長門。しかしすぐに元の剣幕に戻ると、恨みの籠った視線をこちらに向け、話を続ける。

長門「大多数はここに残された金目の物目当てだったが……とりわけ怪しい動きをした者をきつい拷問に掛けてみれば、艦娘の人身売買が目的だという輩もいた。何でも、裏では艦娘は高額で取引されるそうだ。いわく、艦娘は兵器であり、人間ではないから法に触れないのだとか……我々を何だと思っているツ!!」

過去を辿り怒りが頂点に達したのか、長門が近くの壁に拳を叩きつける。瞬間、室内に炸裂音が響き渡り、拳の突き刺さっている位置から放射状に亀裂が走った。

長門「我々は深海の化け物どもから貴様ら人間を守っているんだぞ！ 来る日も来る日も戦い続け、どんなに劣悪な環境下だろうといくら理不尽な命令を下され拳を振るわれようと逃げずに立ち向かった!! なのになんだ!? あの無能は散々私たちを道具扱いし、拳句の果てには自らの体裁を守るために特攻を仕掛けるだ!? ふざけるなッ!!」

殺気を隠すこともなく、体内に燻っていた全ての怨恨を吐き出すかのように声を張り上げる。

長門「奴がいなくなり、ようやく地獄から解放されたかと思えば……軍は私たちを見放した！ 連絡手段は全て切断され、資源配給も止まり、希望を失いかけたその時……我々の知らない外部の人間がやってきた。はじめは未知ゆえに、救いが来たのだと皆諸手を挙げて歓喜したものだ。……だが、現実は違った。誰もが私利私欲のために忍び込んできた猿どもで、ついには我々の身柄さえ奪おうとする輩まで現れる始末……！ 我々は神にすら見放されたのだ！ その絶望が貴様にわかるか!？」

口を戦慄かせ、そう吐き捨てた長門が肩を大きく揺らす。呼吸は荒く、先程より何倍も鋭い眼孔は、今にも目の前の俺を殺さんばかりに血走っていた。

しかしやがて我に戻ったのか、フーと大きく息を吐き、強引に額に滲んだ汗を拭う。そして初めのような平静を取り戻すと、

長門「……いらんことを口走った。ではそろそろ、貴様の目的を正直に吐いてもらおうか。これまでの愚者同様、痛い目を見たくなかったらな」

パキパキと指を鳴らし、その拳の餌食となった壁を背にして長門が先を促す。その声は絶対零度を思わせるほど冷たく、もし俺が意にそぐわない発言をしようものなら、本気で殴り掛かってくるだろうことを感じ取るのは容易だった。

提督「……」

……ここで起きていたことは、まさに最悪たる状況だった。この鎮守府はそれなりの大きさで、つまりはそれ相応の艦娘もいたはずだ。そのすべての艦娘に行きわたるはずの資源がある日突然ゼロになり、さらに連絡も途絶えたのでは困窮を極めただろう。それも、数日ではなく数か月という長い間……そんな中で長門は、ここを守るべく一人奮闘していたのだ。

本来の長門は責任感の塊のようなものだ。艦隊の誰もが絶望に陥っている中で、自分がやらなければと使命感に駆られていたのだろう。燃料も弾薬もないために艤装は動かせない……よって、生身で応戦するしかなかったはず。自らを顧みないその雄姿は、一介の軍人として敬意を表するに値する。

しかしその力の源泉は、提督及び人間、そして軍に対する計り知れない憎悪。事情が事情だけに仕方ないと言えるが、何かを守るために憎悪を原動力としているようでは失格だ。それでは、深海棲艦と何ら変わらない。

長門「どうした。早く話せ」

提督「……何もない。ここにいる理由はさつき話した通りだ。それ以上のことはない」

長門「この期に及んでまだ白を切るとはな。よほど私の拳を喰らいたいらしい」

ぎろりと睨みつけ、鳴らしていた手を握り締める。どうやら、一発貫うことは確定したようだ。

だが、そうやすやすと打たれてやるほど俺は優しくはない。

提督「……長門。殴られる前に、一言いいか」

長門「何だ」

縛られたまま俺がそう申し出ると、長門が怪訝な顔で返す。直後、次に放った俺の言葉に、長門が目を見開き「……そして、激昂する。

提督「もうすぐ俺の鎮守府からここに、大量の修復材を搬入予定だ。ここのだどこだかの部屋に、多くの怪我人があることは知っている。……俺を殺さず、生かしておいた方が賢明だぞ」

長門「……そんな言葉に騙されるかあッ!!」

ついに痺れを切らし、壁を粉碎した長門の拳がうなりを上げて迫ってきた。

第七話 『秘密の地下道』

痺れを切らし、壁を粉碎した拳がうなりを上げて迫る。この威力が生身の人間に直撃すれば、おそらく胴から首が吹き飛んでしまうだろう……が。

提督「――残念だが、その拳は貰えない」

直撃する寸前、後ろ手に結ばれていた縄を解き、解放された腕で拳をいなして回避する。そしてそのまま、前傾姿勢となった長門の軸足を挫き、床に倒れ込んだところで腕を締め上げ組み伏せる。

長門「かはっ！ なぁっ……!?!」

縛られていたはずの男に渾身の一撃を躲されたと思えば、次の瞬間には床にうつ伏せになっている。足元の長門は何が起きたのかわからないといった面持ちで、こちらに驚愕の視線を送ってきていた。

提督「長々とした恨み節を聞いている間に、両手の縄は外させてもらった。拘束するなら両足も一緒に縛るんだったな」

長門「ぐっ……貴様……!!」

提督「因みに、さっきの話は嘘じゃない。人の話はちゃんと聞いて、考えた方が身のためだと知れ」

先程まで俺の手首を縛っていた縄で長門の腕を縛り上げ、ある程度動きを封じて床に放置する。そして、変な体勢で寝ていたために固まった首筋と手首をぐるぐると回してほぐす。

縄抜けは軍人の一般技能ではないが、事あるごとに明石が俺を実験台にしようと拉致を繰り返すため、何度も脱出を試みているうちにいつの間にか習得していた。存外、経験というのは変なところで役に立つものだ。……だからといって、アイツに感謝する気は毛ほどもないが。

ある程度ほぐしが終わったところで、ふとポケットの中の硬い感触が無くなっている事に気付く。あたりを見回すと、机の上に通信機が無造作に置かれているのが目についた。手に取って一通り見たところ、特に外傷もなく、壊されたということもないようだ。

長門「クソツ……！ 私としたことが……！」

提督「悪いが、お前は少しそこで寝ている。力づくで解けるような縛り方はしてないから、解こうとしても無駄だぞ」

長門「なっ……おい、待て!! ぐっ、うううう!!」

交信機を手にそのまま立ち去ろうとする俺に、長門が鬼神もかくやという形相を浮かべ、縄を抜けようと体を幾度となくよじる。が、縄は一向に解ける兆しを見せず、長門が暴れ、ぎしぎしと床のしなる音だけが室内に響く。

そんな長門を尻目に扉から部屋を出た俺は、目の前の光景に眉を顰めた。

提督「……なんだ、ここは」

扉から出た先は鎮守府の廊下ではなく、四方八方を石で囲まれた狭い石廊だった。明かりは天井に吊るされた白色電球のみで、奥の方はその光が点々と続いているようだが、それでもほとんど先が見え

ない。

提督「……地下、か？」

ひとたび声を発すると、遅れて声が木霊する。歩けば、靴が石床を叩く音が響き渡る。トンネルや風呂場などの、密閉された空間特有の反響だ。

提督「ここが地下だというなら、GPSでの場所の判別はつきにくいな。……一応、通信機で時間の確認はしておこう」

そう考え、通信機の電源を入れる。すると、地図上に黒い矢印がその存在を知らしめるかのように点滅していた。

右を向くと、矢印が右に動く。左を向くと、矢印が反転する。ちなみに、通信機は一切動かしていない。

提督「……生体リンクでもしているのか？ あいつの技術は一体どうなってるんだ……。というか、地下でも正常に機能するGPSなんて聞いたことがないぞ」

相変わらずの次元を超えた明石テクノロジーに舌を巻きつつ、早急に時間と場所の確認を行う。最後に時間を確認したのが、艦娘の応急処置を終えた後。それがおよそ1時半で、今がちょうど2時を回ったところだった。つまり、およそ2時間半寝ていた計算になる。

提督「明石との連絡を終えたのが大体9時頃……約束の5時間ともうすぐか。我ながらよく寝てたもんだな」

居眠りをするほど慢心していた自分の愚かさを自嘲しながらも、明石のGPSを頼りに石廊を駆け抜ける。暗がりのせいで長いと思っ

ていた廊下は意外と短く、いくつかの扉を通り過ぎ、突き当たった先には石の階段が上へと続いていた。

提督「座標は……『執務室』の真下？」

座標を確認し、階段の先にある空間に眉を顰める。

執務室の真下に、こんな地下空間を形成した理由……なんとなく察しがつき、ギリツと歯が軋む音がこの閉鎖された空間に響いた。

提督「どこまでも、性根の腐った奴だっ……!!」

階段を二段飛ばしで蹴り昇りながら、激情に任せて言葉を吐き捨てる。

俺が長門に監禁された部屋には、手錠や鞭、そして拘束縄など、俗に拷問器具と呼ばれるような道具の数々が壁や床に無造作に置かれていた。ここの背景を知っているなら、ただの悪趣味だと簡単には笑えない。

長門がここを監禁場所を選んだのも、ここの存在を知っていたからだ。それが実体験ゆえなのか、逮捕後に露見したのかは定かではないが……少なくとも、長門のあの目を見る限り、確実に良いようには使われていないだろう。

込み上げてくる苛立ちを奥歯で噛み潰しながら、螺旋のように捻じ曲がった階段を進み続ける。壁の側面に一定間隔で配備されたランプからは妖しい光が発せられ、闇を照らしてくれる光であるはずなのに、視界にちらつく度に嫌悪感が増していく。

提督「……！ 光が……！」

まだかまだかと昇り続け、やがてランプに照らされるだけだった階段が明るみを帯び始めた。底冷えするような地下とは違い、徐々に空気が暖かくなってくる。

上を見上げると、ランプの光ではない、どこか安堵するような眩い光がすぐ傍まで迫っていた。

第八話 『闇を抜けた先に』

提督「はあつ、はあつ……やつと……!!」

思いのほか長かった階段を登り切り、半開きになった扉に手をかける。そして、仄暗い空間から地上の明るみを享受しようとして外に出た――その時。

提督「――ツ!？」

ぞくりと、背筋に悪寒が走った。

咄嗟に後ろを振り向き両腕を固め、後方より迫る脅威から身を守る。――瞬間、両腕から胴体に重い衝撃が突き抜けた。

提督「ぐおつ……!!」

みしみしと骨が軋み、一瞬の浮遊感とともに体内の空気が口から漏れた。その勢いのまま前方に身を投げ衝撃をいなすが、時間が経つにつれ受けた腕に鈍痛と痺れが徐々に募ってくる。

「完全に虚を突いたと思ったのに……貴方、いったい何者なの？」

膝をつき、痛みに耐えながらも顔を上げる。するとそこには、敵意に満ちた目をこちらに向ける陸奥の姿があった。

提督「……よもや、長門型が揃い踏みとは驚いた。流石、それなりに功績を叩き出していただけある」

陸奥「帰ってきたのが長門じゃなくて貴方ってことは……長門に何

かしたのね？ どうやってあの拘束を解いたのかは知らないけど、貴方には聞きたいことが山ほどあるの。もう一度あそこに戻ってもらおうわ」

提督「おい、待て……俺は別に怪しい者じゃない。何度も言うが、明石の発明に巻き込まれただけなんだ。話くらいは聞いてくれ」

陸奥「あなたと面でも向き合ったのはこれが初めてよ。私にとってはその説明が最初の一度目。……といっても、何回聞いても理解はできなさそうな理由だけどね」

そう言い捨てて、陸奥が再び拳を構える。これ以上は話を聞かないという意思表示だろうか。

陸奥「生身で戦うのは苦手なんだけど……仕方ないわね」

提督「よせ、一旦落ち着け。ここで争ったってどうしようもないだろうが」

陸奥「私だつてできればやりたくないわよ。でもこうしないと、後でせつかな姉に怒られちゃうからーねっ！」

言い終え、床を蹴って陸奥が距離を詰めてくる。そして先程同様、その身に似つかわしくない豪腕を唸らせ、迫ってきた。

提督「くっ……！」

腕にはまだ痺れが残っている。かといって狭い室内、逃げ回ること難しい。

ーならば、相手の想定外を突くまで。

提督「ーっ」

陸奥「えっ!？」

拳と顔面との距離が残り数十センチというところで、突発的に俺はその拳へと突っ込んでいく。

その拍子に陸奥が声を上げるが、眼前に迫る拳を直前で顔を反らし間一髪で避けると、その勢いを保ったまま陸奥の腹部へと突撃し、その体を吹っ飛ばした。

陸奥「うぐっ……!」

陸奥の表情が途端に歪み、倒れるとはいかずとも一步、二歩と後ろへよろけると、苦しそうに両腕で腹を抑え、何度か咳き込みを繰り返した。戦艦に対しての人間体当たりとはいえ、半ばカウンター気味に入った一撃だ。艤装もない今、装甲は人間よりも少し頑丈というだけだろうから、相応の痛みはあるはず。

この機を逃すまいと、ようやく痺れの切れた腕で追撃の姿勢に入る。距離を詰めてくることを嫌ったのか、陸奥が右腕を振り払って拒もうとするが……まさしくそれを狙っていた。

提督「ーっふっ!」

見越していたその腕をがっしりとつかむと、左手は手首を掴み、右腕は二の腕深くを挟んで素早く体を反転させ、足を開くとともに陸奥の身体を前に引き出すようにして思い切り投げる。俗にいう「一本背負い」という技だ。

陸奥「かつ……！」

ろくに受け身も取れないままに体を地面に叩きつけられ、衝撃で陸奥の口から掠れた声が漏れる。そして何度か荒々しく空気を吐き出し、執務室の床に大の字に横たわったまま起き上がったはこなかつた。

提督「……」

静まり返った室内で、深く息を吐く。何故艦娘と戦う羽目になっていいのか……できる限り手加減はしたつもりだが、大丈夫だろうか。

近寄り、呼吸を確かめる。息は弱々しいが特に問題なく、時折胸が上下しているのも見えた。別にやましい気持ちなどない。

提督「よつと……」

倒れた陸奥を抱え、すぐそばの壁まで移動させると、壁にもたれかかるようにしてそつと寝かせる。掛ける衣類がないのがもどかしいが……ここに来るまでに上着を何も着ていなかったのだから仕方ない。

最低限介抱を済ませ、久々に動かした肩を回してほぐす。そしてポケットから通信機を取り出し、時刻を再度確認すると、通信機上に表示された時間はもうすぐ2時15分になろうとしていた。

まだ時間はそう経ってない。あいつからの連絡がないということはまだここに到着していないんだろうが、この感じだとなるべく早くこちらから動いた方がよさそうだ。

陸奥「………ねえ……」

そう思い、まずは外に出なければと立ち上がる。すると、ふいに陸奥が口を開いた。

提督「起きてたのか。……言つとくが、もう戦う気はないからな」

陸奥「ええ……私もよ。体も全然動かないしね……貴方の強さも、十分わかったわ」

弱々しくそう言つて、陸奥が空笑いを浮かべた。その姿は、どうも何かを諦観しているように見えた。

提督「今は安静にしておけ。じきに楽になるから、それまでここで待ってる」

陸奥「……どういう、事……？」

俺の言葉に、陸奥が訝し気に眉を寄せる。……ああ、この言い方だと、まるで俺が殺そうとしているように捉えられてもおかしくないな。

提督「言い方が悪かったな。……もうすぐ、ここに大量の修復材が届く。そうすれば、お前も他の艦娘達も元通りになる」

陸奥「……貴方、提督だったの……？」

先程長門に話した内容を伝えると、陸奥が若干の驚きを滲ませて俺の顔を見る。

提督「ああ。ここにいる経緯はさつき言つたとおりだ。……それと言つても、お前の姉は信じてくれなかったけどな」

陸奥「長門には無理よ……もうあの娘、なんにも信じられなくなつてるもの……」

溜め息をつき、くすりと笑みを零す。すると、壁にもたれかかる陸奥が視線を送ってきた。

陸奥「……ねえ、一つ聞いてもいいかしら……？」

提督「なんだ」

陸奥「……あの部屋、見たでしょう……？ あそこにいる娘達に手当をしてくれたの、貴方……？」

提督「……ああ」

目を閉じ、首肯する。それを見て、陸奥は一瞬声を詰まらせると、視線を下に落としてしまった。

陸奥「……どうして……そんなに優しくするのよ……」

ぼそりと、陸奥が言葉を零す。その顔は、どこことなく困惑の色が浮かんでいるように思えた。

おそらく、関係のないはずの自分たちにそこまでする俺の意図がわからないのだろう。前任がいた頃では考えられない待遇に、何か裏があるんじゃないかと疑っているのかもしれない。

不信に陥っている陸奥に対し、俺は腰を下ろし、目線を合わせる。そして互いの目を合わせ、本心が伝わるように、ゆつくりと言葉を紡いでいく。

提督「……俺は、艦娘が好きなんだ。ただの道具や兵器として接するんじゃない、それこそ家族のように思っている。……だから、ここでお前たちがこんな目にあっているのを知って、黙って見過ごすわけにはいかない」

陸奥「っ……」

提督「もつと早くこの現状に気付いてやれなかったのは、本当にすまなかった。あの時、俺にもつと地位があれば助けられたかもしれないが、そんな力は俺にはなかった。……だが、これからに関しては俺が保証する。だから、信じてほしい」

もしこれを他の誰かが聞いていたなら、綺麗事だと笑われていただろう。だが、これは俺の本心だ。この程度の綺麗事を実行できないようでは、指導者として失格だと言わざるを得ない。

まっすぐに陸奥を見つめ、視線を瞳から外さない。それからしばらく経つと、陸奥はおもむろに視線を外し、観念したかのように溜め息を零した。

陸奥「……わかったわ。信じてあげる」

提督「……ありがとう」

陸奥「……貴方の瞳が、騙そうとしてる人の目じゃなかったから。少なくとも、アイツとは違う」

提督「一緒にしてもらっちゃ困るな。……まあ、そう言ってくれると助かる」

言葉を交わし、俺と陸奥は微かに笑いあう。直後、ポケットから覚えのある振動が伝わってきた。